

令和 6 年 6 月 26 日現在

機関番号：34445

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2023

課題番号：19K14162

研究課題名（和文）保育絵本をめぐる社会関係の史的分析 1950年代～1960年代を中心に

研究課題名（英文）Historical Analysis of Social Relations surrounding Monthly Nursery Picture Books in the 1950s and 1960s

研究代表者

井岡 瑞日（IOKA, MIZUHI）

大阪総合保育大学・児童保育学部・准教授

研究者番号：20836449

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は月刊保育絵本『ひかりのくに』（1946-）に焦点を当て、絵本の保育への導入が進む1950年代～1960年代の状況を分析した。その上で、月刊保育絵本の特徴である幼稚園等への直販システムのもとでどのような社会関係が築かれ、またそのなかでどのような絵本観や子ども観が示されたのかについて検討した。結果として、『ひかりのくに』が第二次世界大戦直後に創刊され、保育の現場や家庭へ普及していった前史と背景や、母親向けの別冊付録や専門誌『保育』等を通じて、幼児期における絵本の重要性をくりかえし説き、家庭や幼稚園等での絵本の取り扱いを説明し、幼児の教育に活用するよう促した経緯が明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

以下の2点が挙げられる。1つ目は、月刊保育絵本が幼稚園や保育所への直販システムのもとで普及することに着目し、絵本と子どもに対する様々な立場の人々の関与や相互の関係性を研究の俎上に載せたことである。このことによって、月刊保育絵本の研究が絵本史のみならず教育史や子ども史の解明にも有効であることを示した。2つ目は、『ひかりのくに』を扱うことで、まだ蓄積が十分でない戦後の月刊保育絵本の研究に貢献したことである。1960年代にかけての相次ぐ創刊や復刊は、園や家庭における絵本の普及を後押しし、保育者や保護者への絵本観に変化を促したことを明らかにすることができた。

研究成果の概要（英文）：This research focuses on the monthly nursery picture book “Hikari no Kuni” (1946-), especially issues published from the 1950s to the 1960s. I examined what kind of social relationships were established through the direct sales system to kindergartens and other childcare facilities. Then, I also investigated what kind of views on picture books and children were formed during this process.

As a result, the prehistory of foundation of “Hikari no Kuni”, published just after World War II, and the background of its spread become clear. This research also revealed how the publisher approached to mothers and teachers through separate appendixes for mothers and the specialized magazine “Hoiku”. They repeatedly explained the importance of picture books in early childhood, gave instructions on how to use picture books, and encouraged to use them in early childhood education.

研究分野：教育史

キーワード：月刊保育絵本 『ひかりのくに』 『保育』 豊田次雄 絵本観 子ども観 保育 家庭教育

1. 研究開始当初の背景

今日、乳幼児期の人間形成における絵本の重要性は誰もが認めるところであろう。例えば、幼稚園や保育所などの施設保育において、保育所保育指針や幼稚園教育要領などの記載が端的に示すように、絵本は子どもが言葉に対する感覚を豊かにしたり、他者と心を通わせたりするための有効な教材であると目されている。また、家庭においては、2001年以降に全国的に展開したブックスタート運動に象徴されるように、乳児期からの「読み聞かせ」を通じた親子の情緒的なつながりを大切にしようとする通念が広く共有されつつある。こうした教育やコミュニケーションの手段としての絵本観、あるいは絵本を通して教育、あるいは愛護していかなければならないとする子ども観は、どのような経緯から生み出されたのだろうか。

上述の問いを出発点とし、本研究は、第二次世界大戦後の日本において、絵本というメディアがその普及過程においてどのように意味づけられ、活用されたのか明らかにすることを目指した。このため、本研究では月刊の保育絵本（以下、単に保育絵本と記す）に着目した。幼稚園・保育所（以下、園と記す）へ直販されることが多かった保育絵本は、それゆえに作家・画家、出版社の編集者や営業担当者、保育者、母親などの多様な思惑や期待をダイレクトに写し出し、またそれらを伝達する役目を担いながら、出版社から園へ、園から家庭へと受容されるものであった。こうした様々な立場の大人たちが保育絵本やその主たるよみ手である子どもにどのような眼差しを注ぎ、また保育絵本をめぐるどのような社会関係を築いたのかを探ることは、絵本が保育や教育の場で重要視されるようになる歴史的経緯を詳らかにするための一助となると考えられる。同時に、本研究は、戦後日本の子ども観や教育観の変遷をたどるための有効な手立てともなりうるのである。

第二次世界大戦後の日本では、保育絵本の嚆矢『キンダーブック』（1927～）に加え、『ひかりのくに』（1946～）、『よいこのくに』（1952～）、『こどものせかい』（1955～）、『こどものとも』（1956～）など、1950年代を中心に現在まで続く主要各誌の創刊や復刊が相次いだ。園の急増や消費の拡大という時代状況とも相まって、これらの保育絵本が絵本の普及に果たした役割は大きいと考えられる。園への直販形式を採用する保育絵本は、主にその内容面において、購買者である保護者のみならず、保育者の共感をも得る必要があった。なぜなら、これらは保育における様々なテーマを織り込んだ教材的性格を有していたからである。すなわち、保育絵本は、出版社から保育現場を仲立ちして家庭へと一直線に至る流通システムの上に成り立つがゆえに、それぞれの立場の大人たちの絵本に対する思惑や願望を可視化するものであるといえる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、1970年代以降の「絵本ブーム」の胎動期にあたる1950年代～1960年代を対象として、当該時期に刊行された保育絵本の編集・出版から園を通じた受容に至る過程において、各段階にかかわった組織や人々がどのような関係を取り結び、その中でどのような絵本観や子ども観が表されたかを総合的に明らかにすることである。このことにより、今日の絵本観やそこに集約される子ども観、教育観が形成される歴史的経緯に迫った。

具体的には、1946（昭和21）年に昭和出版（現在はひかりのくに、以後ひかりのくにで統一）により創刊された保育絵本『ひかりのくに』を主軸に、同シリーズがどのような背景から創刊され、いかなる経緯を経て普及し、また園や家庭に対しどのような影響を及ぼしたのかを明らかにすることを目指した。

3. 研究の方法

先行研究の調査

戦前から戦後にかけての保育絵本、及び施設保育や家庭教育での絵本の受容の歴史についての先行研究を収集・整理し、その到達点と課題を明らかにした。

保育絵本『ひかりのくに』目録の作成

創刊から1960年代までの『ひかりのくに』所収の作品タイトル・作画者等の目録を作成し、当該時期の同シリーズが保育絵本としていかなる特徴を有し、また変化したのかを検討した。

別冊付録（「ひかりのくにママグラフ」ほか）の収集・整理、分析

ひかりのくにが子どもの保護者（母親）に向け保育絵本の取扱いについていかなるメッセージを投げかけたのかを明らかにするため、保育絵本の母親向け別冊付録（1959-1969）（「ひかりのくにママグラフ」ほか）を収集・整理し（所蔵先：大阪府立中央図書館国際児童文学館、国立国会図書館など）、分析を行った。

月刊専門誌『保育』の整理、分析

ひかりのくにが保育関係者や保護者に対し、保育絵本をどのように宣伝したのか、また保育のなかでの絵本の活用について何を語っていたのかを明らかにするため、同社が出版していた月

刊の保育専門誌『保育』を収集・整理し、分析を行った。これに際しては『復刻版『保育』戦後編』（日本図書センター、2014-2017）を用いた。

編集長・豊田次雄についての史・資料の収集・整理、分析

創刊から1960年代にかけての『ひかりのくに』がどのような社会関係のなかで誕生し、その基盤を築いたのかを明らかにするため、『ひかりのくに』と『保育』の編集長を兼務していた豊田次雄（1904-1981）についての史・資料の整理と分析を行った。具体的には、豊田の童謡作家としての経歴に着眼した先行研究、豊田が大阪毎日新聞の記者として編集実務を担っていた戦前の『保育』（全日本保育連盟刊、戦後ひかりのくにより復刊）、豊田が中心メンバーとして活躍した大阪童謡芸術協会の機関誌『童謡芸術』、ひかりのくにに所蔵の社内報などを対象とした。

4．研究成果

研究成果は以下の2つに集約できる。

4 - 1．保育絵本が母親へ与えた影響

まず1つ目は、保育絵本『ひかりのくに』が別冊付録を通して絵本の媒介者となるよう母親を教え導く役割を担っていたことである。

先行研究では、すでに1930年代より保育絵本の先駆け『キンダーブック』の保育者・保護者向けの別冊付録「ツバメノウチ」が絵本の「読み方・使い方の解説」に力を入れていたことが指摘されている（中村 1989など）。しかし、就園率の低い戦前において絵本・絵雑誌などの幼年向けメディアの普及も限定的であったことをふまえると、教育史における絵本の位置づけを探るうえで研究の蓄積がまだ浅い戦後の保育絵本にも視野を広げることが重要であると考えた。

『ひかりのくに』は、『コドモノクニ』（1922～1944）や『子供之友』（1914～1943）のような戦前の総合絵雑誌の流れを汲む保育絵本として戦後いち早く創刊されている（岩崎 2012）。同シリーズは1959（昭和34）年～1969（昭和44）年の10年でタイトルに「母」を冠した園児の母親向けの別冊付録を刊行していた。これらは、幼児の生活指導の教材としての絵本観にもとづき、園のよき理解者であり、有能な家庭教育者である母親を育成する一環として、母親が絵本へ関心を向けるよう説き、その扱いについての手引きや助言を与えた。具体的には、日常のしつけや読書レディネスの形成の観点から、あるいは母子のコミュニケーション促進の観点から、母親が絵本を読み聞かせ、絵本を前にして母子で語らうことの重要性を唱えたのである。このことは同時に、絵本への母親の積極的な関与が、当時の読者層にとって自明ではなかったことを意味するものであった。

一方、1960年代後半に入ると、別冊付録はその対象を次第に園の保育者へと拡大し始めるようになり、母親へ向けた教導的な性格も薄れていくことになる。その原因として、絵本の媒介者を自任するようになった現実の母親が教導の対象ではなくなりつつあったこと、親子読書運動の全国展開を背景に母子で読書空間を共有すること自体が重要視されるようになるにつれ、絵本の受容の多様化が促されたこと、園の保育における絵本活用の可能性が模索され始めたことなどが考えられた。このように、高度成長期の教育熱の高まりを背景に、保育絵本は賢く愛情豊かな母親による家庭教育の手段としての絵本観の拡大と媒介者としての母親の育成に大きな役割を果たしていたことが明らかとなった。

4 - 2．保育への絵本普及において保育絵本が果たした役割

2つ目は、『ひかりのくに』の創刊と地盤固めに貢献した編集長・豊田次雄の戦前の活躍が、保育における絵本の普及にも多大な影響を及ぼしていたことである。

保育内容関係法規に初めて「絵本」が出現するのは1956（昭和31）年の幼稚園教育要領においてであり（三宅 1997）、岩波書店「岩波の子どもの本」シリーズ（1953～）や上述の福音館『こどものとも』の登場によって確立していく物語絵本が保育の言語活動として定着し始めるのは1960年代以降のことである（若林 2018など）。絵本と保育とが実践のレベルで急接近していくと仮定されるこの時期に『ひかりのくに』の編集長を務めた（1947～1966）のが豊田次雄である。豊田は戦前から童謡・童話作家、ジャーナリスト、幼稚園経営者として大阪を中心とした関西地方での児童文化推進の中枢を担い（畑中 2018ほか）、このことが初期の『ひかりのくに』の土壌をかたちづけていた。また、戦後は『ひかりのくに』に加え、『保育』の編集長を兼任しており、保育者らへの保育絵本の宣伝という点で影響を及ぼしうる立場にあった。

豊田編集長時代の『ひかりのくに』は一冊複数話（総合絵雑誌）形式から1960年代以降の一冊一話（物語絵本）形式への漸次的な移行を大きな特徴としており、豊田は掲載作品を創作しつつ、同じく童謡作家の小春久一郎らと共に誌面づくりに従事した。一方、豊田が編集のみならず、1950年代までは積極的にコラムなどの執筆を行っていた『保育』では、同月の『ひかりのくに』の解説や取り扱い、保育実践における活用例の紹介などが盛んに掲載されている。その結果、両誌には「絵本」と「保育」とを取り結ぶ強いつながりが形成された。また、豊田は上記二誌の編集業務と並行して、童謡・童話の創作や保育者への普及・啓蒙活動を行い、なおかつ全国各地の園へ童話口演や絵本の講演・講習のために頻繁に出向いてもいた。こうした状況を可能にしたのは、戦前に大阪毎日新聞の記者を務め、自らも幼稚園を経営しながら保育関

係者とのネットワークを築き、各所と連携しながら童謡の創作、実践、普及活動に身を投じた豊田ならではの経緯であった。豊田は、戦前から1960年代半ばまでに幼児向けの童謡や童話と絵本という二種の異なる幼児向け文化の間を行きつ戻りつしつつ、両者を連関させながら、徐々に絵本へ軸足を移していった。

以上から『ひかりのくに』が、童謡を中心とした戦前の豊かな児童文化を継承しながら、それらを培地として誕生したことが明らかとなった。豊田によって牽引された初期の『ひかりのくに』は、時代の流れに後押しされ総合絵雑誌から月刊の物語絵本への変遷をたどりながら、編集長豊田の戦前からの活動経験を糧として「絵本」というメディアの保育教材としての活用可能性やその具体的な方法を、拡大する保育者層に提示してみせたのである。

このように、主に出版社サイドから発信された一次史料を整理・検討することで、保育絵本『ひかりのくに』が家庭（保護者）と園（保育者）へどのように波及したのか、またその過程でいかなる絵本観が示されたのかを明らかにした。一方、保育絵本の受容の実際（出版社の営業担当者が園に対しどのような働きかけを行うことで販路を拡大したのか、園から家庭へはどのように手渡されたのかなど）については十分検討することができなかった。また、『ひかりのくに』をめぐる動向を他社の保育絵本との関係性のなかで位置づけ、全体を俯瞰する作業も欠かせない。これらについては今後の課題として引き続き研究に取り組んでいきたい。

参考文献：

- 岩崎真理子 2002 「絵雑誌から月刊絵本へ 戦後絵雑誌の流れ」『はじめて学ぶ日本の絵本史 戦後絵本の歩みと展望』（シリーズ・日本の文学史）ミネルヴァ書房
- 中村悦子 1989 『幼年絵雑誌の世界 幼児の教育と子どもの生活の中から』高文堂
- 畑中圭一 2018 「豊田次雄の業績 関西における児童文化の推進者として」『翰苑』9号
- 三宅興子編著 1997 『日本における子ども絵本成立史』ミネルヴァ書房
- 若林陽子 2018 「1960年代の保育の言語活動における物語絵本の広がり」と位置づけと素話・紙芝居との比較を通じた検討」『読書科学』60巻2号

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 井岡 瑞日	4. 巻 27
2. 論文標題 保育絵本に対する母親の働きかけについての歴史的考察 1960年代の『ひかりのくに』別冊付録を手がかりとして	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 子ども社会研究	6. 最初と最後の頁 185-205
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 井岡 瑞日	4. 巻 11
2. 論文標題 月刊保育絵本『ひかりのくに』における 編集長・豊田次雄の果たした役割	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 世界子ども学研究会紀要HALCYON	6. 最初と最後の頁 31-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 井岡瑞日
2. 発表標題 『ひかりのくに』編集長・豊田次雄の仕事 にみる月刊保育絵本の歴史的位置づけ
3. 学会等名 絵本学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 井岡瑞日
2. 発表標題 保育絵本をめぐる母役割についての歴史的考察 1960年代の「ひかりのくに」を中心に
3. 学会等名 日本保育学会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 村井尚子、森久佳、岩槻知也、宮崎元裕、青木佳代、柴田賢一、井岡瑞日、草野舞	4. 発行年 2023年
2. 出版社 青踏社	5. 総ページ数 202
3. 書名 子どもの未来を拓く「教育原理」	

1. 著者名 安部孝、森田裕之、安部日珠沙、杉原央樹、井岡瑞日、笹川啓一、川上英明、宮崎元裕、石崎ちひろ、村上博文、横島三和子、石見容子、本多舞、栗原真孝、坂本雅彦	4. 発行年 2024年
2. 出版社 みらい	5. 総ページ数 179
3. 書名 実践につなぐ 教育原理 教育・保育をひらく	

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------